『紅楼夢』の‘来’と‘去’

――物語りの文章における視点表現――

今　井　敬　子

は　じ　め　に

空間移動とその直示的な方向を表す動詞は，‘来る’と‘行く’，‘come’と‘go’などのように二項対立のかたちで多くの言語に見られるが，中国語においては‘来’と‘去’がこれに相当し，動詞として単用されるだけでなく，他の動作動詞に後置されて，動作主体や動作対象の移動の方向を表す方向補語としても用いられる。

‘来’と‘去’に関する直示表現では，方位の中心（＝視点のありか）は一人称の位置・領域に置かれること，また，一定の条件下では二人称の位置・領域へ方位の中心の推移が見られることは，先行研究によって既に明らかにされている(1)。

一・二人称が直接に介在しない場合にも，‘来’と‘去’が対立的に用いられるが，これはいわば直示表現の間接化された用法として捉えることができよう。たとえば，三人称の人物に関わるうごきの方向が，別の三人称の人物の視点を借りて捉えられ，‘来’と‘去’が使いわけられているような例は，物語りなどの文章に一般に見られるところである。

小論では，上のような場合も含め，一・二人称が介在しない場合の‘来’と‘去’の用法を取りあげて(2)，特に，視点とのかかわりにおける使いわけの条件について考察を試みるが，テキストとしては，非人称の語り手と三人称の登場人物という構図から成る清代白話長篇小説『紅楼夢』（人民文学出版社，1985年）を用いる。本作品を取り上げた理由は，物語りの文章に広く見られるところの三人称の登場人物の視点を借りた用法と併存して，非人称の語り手の視点が直接に採用されていると理解される用法が多数見られることに着目したためである。

小論は考察の中心をこの両者の用法の関連性と，それぞれの使用条件の異同を明らかにすることに置きたい。

I

一人称の話し手が中心となる談話に対し，物語では語り手の視点から事象が観察され描写されるので，物語世界の空間方位については，語り手の位置が中心となるような方位体系が築かれると考えられる。しかし，スタンツェル 1979. の指摘にもあるように，非人称の局外の語り手の場合，その肉体性の欠如のために，一人称の話し手の場合のようには，明瞭な方位体系を容易には構築しえない。その場合，ひとつには，登場人物の位置を語り手がそのまま借りて，そこを方位の中心とする場合―いいかえれば登場人物の視点に立って，人やもののうごきの方向をとらえその人物の位置する地点へ向かううごきの方向を‘来’で，そこから遠ざかるうごきの方向を‘去’で表す場合―が挙げられる。語り手は，複数の登場人物の中

のいずれの視点をも原則的には借りることができるが，一方で，物語の中心的な人物と非中心的な人物とでは前者の視点の方が採用されやすいという，物語一般に共通して見られる原則がある。また，文，文脈レベルにおいては，主題化された人物などのように，叙述の対象となっている人物の視点が，他の人物に比して，より採用されやすいという，三人称の登場人物間に見られる視点の優先度の差が存在する(3)。

一方で，‘来’は到着点側の人物の視点，‘去’は出発点側の人物の視点にそれぞれ立脚しているとする‘来’と‘去’の基本原則があり，以上の諸条件が，互いに矛盾を生じない場合は，登場人物の視点を借りて人やもののうごきの方向が捉えられていると理解できよう。たとえば以下の(1)―(5)はそのような例である。

(1)は方向補語‘来’，‘去’を用いた主体移動及び対象移動の例である。

(1)　（宝玉）……只聴背後説道：“二爺仔細燙了手，讓我們来倒”。一面説，一面走上来，早接了碗過去。（24回341頁）（宝玉が……背後に「若さま，やけどしないようにお気をつけて。私にお茶をつがせてください。」という声をきいたかとおもうと，（声の主は）近寄ってきて，さっと茶碗をとりさりました。）

(1)では，宝玉の背後の人物の，宝玉に接近するうごきの方向が‘来’で示され，同じ人物によって宝玉から遠ざけられる茶碗のうごきの方向が‘去’で示されているが，いずれも宝玉の視点を借りて，‘来’或いは‘去’が選択されている。

(2)は動詞‘来’，‘去’を用いた主体移動の例である。

(2)　那賈瑞只盼不到晩上，偏生家里親戚又来了，直等喫了晩飯才去，那天已有掌灯時侯。（12回168頁）（賈瑞は夜になるのを待ちきれずにいましたが，あいにく親戚の者が訪ねてきて，夕食を終えてからやっと帰って行ったときには，すでに灯ともし頃でした。）

(2)では，親戚の者のうごきの方向が賈瑞の視点を借りて捉えられ，賈瑞に接近するうごきが‘来’によって，賈瑞から遠ざかるうごきが‘去’によってあらわされている。

(1)，(2)では，うごきの主体あるいは対象移動をひきおこす動作の主体と，うごきを見る主体とが，別の人物である。物語の語り手は，登場人物のひとりの視点を借りて，別の登場人物のうごきやもののうごきの方向を捉えている。

次の(3)では，ふたりの人物によるそれぞれの主体移動の様子が表されているが，そのうちのひとりはうごきを見る主体でもある。

(3)　宝釵……説着便挪進前来，宝玉亦湊了上去従項上摘了下来遞在宝釵手内（8回123頁）（宝釵は……話しつつ前へにじりよってきました。宝玉も近寄っていって，首から（玉を）はずし，宝釵の手に渡しました。）

(3)は宝釵と宝玉が，それぞれ身につけている玉をめぐってやりとりをしている描写の一部であり，ふたりが互いに相手に接近するうごきが表されている。宝釵のうごきの方向は宝玉の視点から捉えられ，‘来’でしめされている。一方の宝玉のうごきの方向も，宝玉自身の視点から捉えられ，‘去’で示されていると理解できる。双方向性のふたりのうごきのどちらもが，そのうちの一方の動作主体の宝玉の視点寄りで捉えられていることになる。

次の(4)，(5)は対象移動の例であるが，動作主体とうごきを見る主体とが同一人物であると理解できる例である。

(4)　宝玉早向賈珍手里接過対牌来，強遞与鳳姐了。（13回183頁）（宝玉ははやくも賈珍の手

から割符を受け取り，むりに鳳姐に手渡しました。）

(4)では，割符は宝玉の「受け取る」動作によって同室に座している賈珍の手から宝玉の手にわたる。そのうごきの方向が，うごきの到達点にいる動作主体の宝玉の視点を借りて捉えられ，‘来’によって示されている。

次の(5)では，対象移動の動作主体と出発点にいる人物とが同一人物である。

(5) 平児方端了茶来，递了過去，説道……（11回164頁）（平児はちょうどお茶を運んできましたが，それを手渡して言うには……）

(5)では，お茶は平児の「手渡す」動作によって，平児から鳳姐に渡される。そのうごきの方向が，うごきの出発点に位置する動作主体の平児の視点から捉えられ，‘去’によって示されている。

対象移動に関する方向補語‘来’と‘去’の使用範囲が，日本語の‘一てくる’と‘一ていく’に比してはるかに広いことは森山 1988．でも言及されているが[4]，(4)の‘接過対牌来’（？割符をうけとってくる）と(5)の‘递了過去’（？手渡していった）も，そのような例として挙げられよう。『紅楼夢』の中には，対象移動の描写について‘来’或いは‘去’がその都度付されて移動の方向が詳らかに明示されている例が多数見られ，(4)，(5)のように，動作主体に接近する対象物のうごきの方向が‘来’，遠ざかるうごきの方向が‘去’で使いわけられていると理解できる例も多く見られる。‘去’には中立的な視点に立った非直示的な用法も見られるが，(5)の‘去’は，(4)の‘来’の用法との対称的用法として捉えられ，出発点にいる登場人物の視点に立った表現と理解することができよう。

(1)〜(5)に見られる‘来’と‘去’のように，三人称の登場人物間の視点関係に基づいた表現として理解できる例に対し，うごきに関する方位の中心に登場人物が位置するにもかかわらず，同様の理解が困難な例が存在する。次節では，それらの具体例を挙げて検討してみたい。

II

『紅楼夢』の語りの文章には，人やもののうごきの方向について‘来’が‘去’にくらべはるかに多用されているが，それらの‘来’のなかには，到達点に位置する登場人物の視点が採用されているとは理解しがたいような例が数多くみられる。まず，方向補語の例からとりあげてみる。

(6) （宝玉）正盼望時，只見一個老姆姆出来。宝玉如得了珍宝，便赶上来拉他，説道……（33回456頁）（宝玉が待ちうけていると，ちょうど老女がひとり出てくるのが目に入りました。宝玉は宝物でもみつけたかのように，近寄ってきて，老女をつかまえて言うには……）

(6)で問題となるのは宝玉のうごきを表す‘赶上来’の‘来’である。これは老女に接近するうごきであることから，うごきの到達点に位置する老女の視点を借りて‘来’が用いられていると理解できるであろうか。老女は初出の人物であり，一方の宝玉は文主題である。また，老女は，宝玉を知覚主体とする‘只見’の知覚内容を表す埋め込まれた文の中に現れる。このように到達点に位置する老女寄りの視点がとりにくい条件の下で，‘来’が使用されていることになる。

次の(7)ではうごきの到達点に登場人物のいずれも位置していないが，うごきの方向が‘来’

で示されている。

(7)　正説時，人回大夫来了。宝玉便走過来，避在書架之後。只見両三個後門口的老嬤嬤帯了一個大夫進来。（51回717頁）（（宝玉が晴雯に）ちょうど話しかけているとき，医者が来たと知らせがはいりました。宝玉は，歩いてくると書架のうしろに身をかくしました。裏門詰めの二・三人の婆やが，医者を案内して入ってくるのが見えました。）

(7)の文中の宝玉のうごきを表す‘走過来’に関しては，うごきの到達点の‘書架之後’のあたりに登場人物のだれかが位置しているわけではない。したがってこの例は，到達点にいる登場人物の視点を借りて‘来’が用いられているとは考えがたい。

(6)の‘赶上来’と(7)の‘走過来’によって表わされるうごきは，いずれも，到達点においてそれぞれ‘拉他’，‘避在書架之後’によって表わされる動作を遂行するためのうごきであり，同一主体によるうごきとその目的であるところの動作があわせて表されている，という共通点が見られるが，(6)，(7)のような‘来’の用法は『紅楼夢』の語りの文章には数多く見られる。さらに，例を加えて検討を進めてみる。

次の(8)は同一人物による，二ヶ所の地点へ向かう連続したうごきが表されている。

(8)　隆児等慌的忙放下酒杯，出来喝馬，好容易喝住，另栓好了，方進来。鮑二家的笑説……（65回929頁）（隆児らはあわてて酒杯を置くと，出てきて馬をしかりつけ，やっとのことで鎮めてから別々につなぎとめ，（もといた部屋に）入ってきます。鮑二の家人が笑いながら言うには……）

(8)では隆児が部屋を出て，（厩でさわぎだした）馬をしずめ，それから部屋に戻る，という一連のうごきと動作が表されている。‘出来’によって表されるうごきの到達点には登場人物のいずれも位置していない点で，(7)の問題の‘来’と同様である。また，‘進来’によって表されるうごきのほうは，その到達点に先行文脈内にすでに登場している鮑二の家人がいる。

同一の部屋に関する「出る」と「入る」の逆方向のうごきが一定の視点からとらえられるなら，その方向は‘来’と‘去’で使い分けられるはずである。(8)における‘来’の連続使用は，一文中に方位の中心が二つ存在し，したがって二つの異った視点から鮑二たちのうごきが捉えられていることになる。ここでの‘出来’は，(6)，(7)の問題の‘来’を用いたうごきと同様，到達点での動作（ここでは‘喝馬’）を目的としたうごきを表している。

次の(9)，(10)，(11)，(12)は動詞‘来’が用いられている例である。

(9)　Ｙ鬟們道：“那屋里不是四姑娘？”周瑞家的聴了，便往這辺屋里来。只見惜春正同水月庵的小姑子智能児一処頑耍呢，……（７回110頁）（侍女たちが「四番目のお嬢さまはあちらのお部屋にいらっしゃるのでは？」と言うと，周瑞の家人はそれを聞いてこちらの部屋に来ます。と，そこでは惜春が小月庵の若い尼僧の智能児といっしょにいて，ふざけあっているところでした。）

周瑞の家人は最初に侍女達と同一の部屋にいて，そこから惜春のいる部屋へ移動する。そのうごきの到達点には惜春と智能児がいるが，ふたりは周瑞の家人の知覚内容を表わす‘只見’以下の文中で初出であり，その視点が周端の視点に優先して採用され，‘来’が用いられているとは理解しがたい。

(10)　宝玉，探春……正説着只見宝釵那辺笑道：“説完了来罢。……。”説着，探春宝玉二人方笑着来了。宝玉因不見了林黛玉，便知他躲了別処去了，……（27回382頁）（宝玉と探春が

話しているところを，宝釵があちらから笑いかけて「お話が済んだら来て下さいね。……」と言うと，探春と宝玉のふたりは笑いながら来ました。宝玉は，黛玉の姿が見えなくなっているので，よそへ逃げたのだとわかりましたが……）

⑽の前半部分は，‘只見’の知覚主体が宝玉と探春であること，宝釵は，その知覚内容を表す埋め込まれた文中に現れ，その位置は遠称‘那辺’で指示されていることからも明白なように，宝玉と探春寄りの視点からの描写がとられている。ところが同一文の後半部分では宝釵に接近するふたりのうごきが‘来’であらわされ，これを到達点にいる登場人物の視点寄りの表現と解すると，宝釵寄りに視点が移動していることになる。

次の⑾，⑿は，目的地へ向かう途上にうごきの主体がいるような場合に‘来’が用いられている例である。

⑾ 這日宝釵因来瞧黛玉，恰値岫烟也来黛玉，二人在半路相遇。宝釵含笑喚他到前，二人同走至一塊石壁後，……（57回810頁）（この日，宝釵は黛玉を見舞いに来ますが，ちょうど岫烟も黛玉の見舞いに来て，ふたりは道の途中でゆきあいました。宝釵は笑顔で岫烟をそばに呼び，ふたりは石壁の裏手にまわりまして，……）

⑾は宝釵と岫烟に関するひとつのエピソードの始まりの部分である。ふたりが向かおうとする到達点には黛玉がいるが，黛玉はこのエピソードの中で⑾の文中の動詞‘瞧’の目的語としてはじめて登場することから，黛玉の視点が採用されて‘来’が用いられているとは理解しがたい。

⑿ 湘雲……便往大観園来，見過了李宮裁，少坐片時，便往怡紅院来找襲人。因回頭説道：“你們不必跟着，只管瞧你們的朋友親戚去，留下翠縷伏侍就是了。”……（31回438頁）（湘雲は……大観園へ来て，李宮裁に会い，しばらく話してから，怡紅院へ襲人を訪ねるために来ます。そこで，「おまえたち，ついてこなくてもいいから。友人や親戚に会いに行きなさい。翠縷が残って世話をしてくれれば十分です。」と（付き添いの者たちに）言いました。）

⿿の中心は怡紅院へ向かう途上にいる。到達点の怡紅院には襲人がいるが，本文の文脈では，動詞‘找’の目的語が指示する人物としてはじめてあらわれることから，襲人の視点が採用されて‘来’が選択されているとは考えがたい。

以上のような例が，到達点にいる登場人物の視点を借りた表現としては説明しがたいとすると，別のなんらかの根拠によって‘来’が用いられていることになる。ここで，方位の中心が，語り手の設定した物語空間のある場所（登場人物がそこに位置するか否かは特に問われない）に置かれるとされる場合について検討してみたい。このような場所は，「叙述・描写の対象（の位置）」「事件の発生地点」「話題の中心」などと説明されてきた[5]。それらがいかなる具体的な文脈上あるいは構文上の条件を必要とする場所であるか，についての言及は見られないが劉・潘・胡 1983. には次の⒀，⒁のふたつの具体例が挙げてある。（例文中の二重のアンダーラインは方位の中心を示す）

⒀ 為了井岡山変得更快，党派来了両千好児女，同井岡山人一起来開発這座万宝山。（井岡山がさらにはやく変わるようにと，党は二千人の良き少年少女を派遣してこの地へ来させ，井岡山の人びとといっしょにこの万宝山を切り開かせた。）

⒁ 会場里坐了不少人，這時還不断有人進来。（会場にはたくさんの人がすわっていたが，

なお絶え間なく人が入ってきた。）

上の二例から明かなことは，方位の中心となっている場所を指示する語句が，‘来’に先行する句中に置かれ主題や場所主語となっていること，また，⒀の‘来’と⒁の‘進来’の論理上の主語であるうごきの主体は不特定名詞（両千好児女，（有）人）によって指示される人物であることである。これらの特徴を，三人称間の視点表現の原則と照らし合わせると，うごきの主体（不特定人物）の視点は優先度が低く，一方のうごきの到達点（主題・主語）のほうは，もしそこに視点主体が位置するならその視点は優先度が高い。うごきの到達点に特定される人物が明示されていないため，具体的な視点主体がみつけられないが，⒀，⒁のようなケースは三人称間の視点表現に準ずる用法として説明可能である。⑹—⒁は，これに対し，初出の人物或いは場所へ向かううごきに‘来’が用いられている点で，⒀，⒁とは大きく異っている。問題は，このように文中に初めて導入された要素をなぜ方位の中心として設定できるのかということになる。

III

⑹—⒁に挙げたような，三人称間の視点表現としては理解しがたい‘来’の用法について考察をすすめるため，この種の‘来’が‘去’と近接する位置で対比的に用いられていると理解できる例をとりあげて検討してみる。

⒂　宝釵因約黛玉往藕香榜去，代玉回説立刻要洗澡，便各自散了。宝釵独自行来，順路進了怡紅院，……（36回490頁）（宝釵は藕香榭へ行こうと黛玉を誘いましたが，黛玉はお風呂に入るからと答え，それぞれわかれました。宝釵はひとりでやって来て，道すがら怡紅院に入りましたところ……）

⒃　不想林黛玉因遇見史湘雲約他来与襲人道喜，二人来至院中，見静悄悄的……（36回491頁）（図らずも黛玉は湘雲に出遇い，襲人にお祝いを言いに行こうと誘われまして，ふたりは院のなかに来ましたが，ひっそりと静まりかえっていて，……）

⒂と⒃は，いずれも36回の中の近接した位置におかれた文であり，内容の上でも相互に関連をもっている。どちらにも，ある目的のためにある場所へ行くことを誘うという表現が見られるが，‘去’を用いた⒂はうごきが実現されないのに対して，‘来’を用いた⒃では実現される，という違いがみられる。

次の⒄は同一主体による同一地点へ向かううごきが，２回にわたって表されているが，最初は‘去’が，次に‘来’が用いられている。

⒄　一時薛姨媽換了衣装，拉着宝釵進去。薛蟠方出去了。這里薛姨媽和宝釵進園来，瞧宝玉，到了怡紅院中，只見……（35回476頁）（やがて薛姨媽は，服を着替えると宝釵を連れて（園内へ）入って行き，薛留はやっと部屋を出て行きました。こちら薛姨媽と宝釵は，宝玉を見舞いに園内に入って来て，怡紅院に着いてみると……）

⒄では薛姨媽と宝釵の園内へ向かううごきの方向は最初は‘去’で示され，次に改めて‘来’で示されてから，後続文において到達点での情景が描写されている。

次の⒅は，同一主体による二ヶ所の異なる地点への連続移動が表されているが，一方の場所へ向かううごきが‘去’によって，もう一方の場所へ向かううごきが‘来’によって示されている。

⑱ 這日宝玉因見湘雲漸愈，然後去看黛玉，正値黛玉才歇午覚。宝玉不敢驚動，因紫鵑正在回廊上手里做針黹。便来問他……（57回798頁）（この日宝玉は湘雲の病気がよくなったとわかると，つぎに黛玉を見舞いに行きました。ちょうど黛玉は昼寝をしていたので，宝玉は騒がせるのはよして，紫鵑が回廊のところで針仕事をしているのを幸いとやって来て紫鵑にたずねるには……）

⑱では‘去’によって表されるうごきの到達点では物語が展開をみせないのに対し，‘来’のほうはそのうごきの到達点での光景の描写が後続句でなされている。

‘来’と‘去’の対比は次の⑲ではさらに明瞭である。⑲は，同一場所にいた複数人物がふたてにわかれて別々の地点へ移動するところが表わされているが，一方のうごきについては‘来’，もう一方のうごきについては‘去’が用いられている。

⑲ 於是尤氏請了邢夫人，王夫人並他母親都過会芳園去了。鳳姐児，宝玉方和賈蓉到秦氏這辺来了。進了房門，悄悄的走到里間房門口，秦氏見了，……（11回158頁）（そこで尤氏は邢夫人，王夫人と自分の母につきそって会芳園へ行きました。鳳姐，宝玉と賈蓉は秦氏のところへ来ました。部屋の戸口を入り，そっと奥の間の入り口のところまで歩くと，秦氏が気付いて，……）

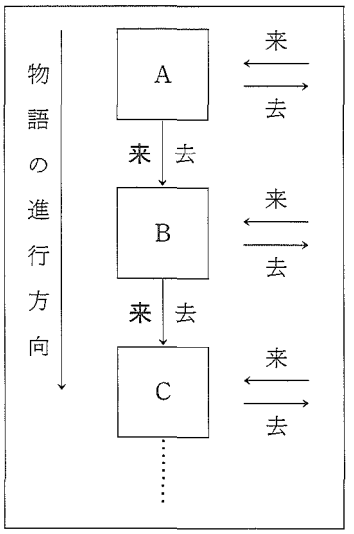
⑲では，‘去’によって表わされるうごきの主体の尤氏，邢夫人，王夫人および尤氏の母親についての叙述は後続文では見られず，これらの人物はいわば物語場面から一旦退場するかたちとなる。一方‘来’のほうは，うごきの到達点の秦氏の住まいでの情景やうごきの主体の鳳姐，宝玉，賈蓉と到達点にいる秦氏たちの様子が後続文で描写されている。

‘去’は特に‘来’と対比されずに単独で文中にあらわれるときも，たとえば⑳のように，物語の展開につながらないうごきとして表される場合がよく見られる。

⑳ 話説宝玉養過了三十三天之後，不但身体強壮，亦且連臉上瘡痕平服，仍回大観園内去。這也不在話下。（26回360頁）（さて宝玉は，33日間養生したあと，からだもしっかりしてきたばかりか，顔の傷もすっかりなおったので，もとどおり大観園へ帰っていきました。この話しはここまで。）

以上のように，三人称間の視点表現では説明し切れない‘来’は，‘去’との対比的用法の例からも明らかなように，到達点における情景や人びとの様子が後続句（文）の中で描かれて物語が進展してゆくような場合に用いられる。このような‘来’によって示されるうごきの到達点は，いわば旧場面に替わる新場面として物語の進行軸上に設定され，‘来’はそのような新場面へ導く方向指示標識として用いられているといってもよいであろう。一方，‘去’のほうの到達点は，物語の新場面とはならず，‘去’は物語の展開につながらないようなうごきの方向指示標識として用いられているといえよう。このような‘来’によって導かれるところの到達点は，旧場面（先行文脈）であらかじめ提示されているような場所ではなく，又，到達点にいる人物も旧場面には見られなかったあらたな登場人物である，という特徴が見られる。そのような新出の場所や人物へ向かううごきの方向について，三人称間の視点表現では‘来’を用いることが許容されないので，この‘来’は到達点にいる登場人物の視点を採用した表現ではありえない。これは，局外の非人称の語り手が，想像のうえで自らを物語の進行軸上にあるその場所におき，そこを方位の中心として設定し，そこへ向かううごきを‘来’で示し，そこから遠ざかるうごきを‘去’で示していると理解されよう。

『紅楼夢』の語りの文章における間接化された直示用法の‘来’と‘去’は，二種類の方位の中心を基準として使い分けられている。ひとつは，既に文中に明示的に導入されているような，多くの場合文主題であるような登場人物（の位置）や場所であり（例(1)—(5)，(13)，(14)），もうひとつは語り手が想像の上で位置する，物語の進行軸上の初出の空間である（例(6)—(12)，(15)—(19)）。前者では，うごきの方向性は三人称間の視点表現の原則によって決定されるが，後者の場合には同様の原則は適用されない。方位の中心と‘来’，‘去’の方向性，物語の進行との間に見られる相互の関係は，以下のように図式化してみることができる。



（図　1）

図中のA，B，Cは方位の中心であるところの物語場面（場所，人物）を表している。場面Aに関わるうごきを例にとると，ヨコの矢印で示される‘来’と‘去’は既に文中に導入されている場所や人物（すなわちA）が方位の中心となったときのうごきの方向を示す。これはうごきの主体とは別の，Aにいる登場人物の視点から捉えられた方向性を示し（例(1)と(2)の‘来’と‘去’，(3)の‘来’），この他にいわゆる「話題の中心」などへ向かう‘来’（例(13)，(14)）及び対象移動の動作主体が同時に視点主体でもある場合の‘来’（例(4)）もヨコの‘来’である。

タテの‘去’は既出の場所や人物（すなわちA）を方位の中心とし，うごきの主体や対象移動の動作主体が同時に視点主体でもあるとき（例(3)，(5)）がこれに相当する。

これらに対しタテの‘来’の方位の中心はAではなく，初出の場所や人物をあらわすBであり，これは語り手の想像上の位置Bからの視点表現によるものである（例(6)〜(12)，(15)〜(19)）。このとき，うごきの到達点であるBにたとえ登場人物が位置する場合でも，その人物の視点が採用されるわけではない（例(6)，(11)，(12)，(16)，(17)，(18)）。

物語の進行方向に沿ったタテのうごきの方向性が‘来’で示される場合に物語は以下のように進行する。Aにいる人物のいずれかがBへ向かう。その移動（タテの‘来’）と到達によってBが新たな物語場面として設定されると，そこを方位の中心として人やものの移動（ヨコの‘来’と‘去’）が起こる。次に，Bにいる人物のいずれかがCへ向かい到着することによって，Cが次の新場面として設定され，ヨコの‘来’，‘去’に関する方位の中心となる，というように新たな物語場面がタテの‘来’の使用を通して設定されていく。

『紅楼夢』の語りの文章では，タテのうごきについて，新出場面を方位の中心とする‘来’が既出場面を方位の中心とする‘去’より圧倒的に多く見られることが特徴的である。新出場面が方位の中心となりうることは，神尾 1990. による旧情報は話し手にとって<近>な情報であり，新情報は<遠>な情報であるという情報認知の一般原則[6]に矛盾するかに見えるが，これは『紅楼夢』の非人称の語り手が，非人称ゆえに自己の視点の位置を制限されることなく，新・旧いずれの場面にも立脚した視点をとりうることを示しているといえよう。

Hopper 1979. は，語りの文章において，叙述内容を前景（foregrounding）と後景

（backgrounding）に区分するような言語的操作のなされることを指摘し，物語の主筋に導かれる前景化には，語り手の主観や評価などを暗示するような様々な言語的手法が見られることを述べている。

『紅楼夢』は，説話を来源とする伝統的な語りの形式を多分に残存しており，各章回の末尾やエピソードの始めと終りの部分に常套的に用いられる講釈師の口調に倣ったいいまわし，あるいは語り手が読者を対称詞‘你’で指して直接問いかける部分などが，語り手の主観性の直接的な表出であるなら，タテの‘来’の多用は，間接的な暗示による語り手の主観性表出であり，この種の‘来’が新場面を導くことによって，物語の進行に深く関与していることからもHopperが述べるところの前景化と何らかの関連性を有するものとして捉えることも可能であろう。

Ⅳ

『紅楼夢』には写本のあいだに書き換えが見られるが，程乙本を底本とした『紅楼夢』（全４巻，人民文学出版社，1980年）（以下，程乙と略称する。）に見られる‘来’と‘去’の書き換えの典型的な例を以下に数例挙げ，小論の図１に照らして書き換えの根拠に説明を加えてみる。(21)から(23)は，アンダーラインを付した‘去’について‘来’への書き換えが見られる例である。

(21) 周瑞家的還欲説話時，忽聴王夫人問：“誰在房里呢？”周瑞家的忙出去答応了，便回了劉姥姥之事。（７回109頁）（周瑞の家人はなおも話しつづけようとすると，突然王夫人が「誰か奥の間にいるの？」とたずねるのが聞こえました。周瑞の家人はいそいで出て行って返事をし，ついでに劉婆さんの件を報告しました。）

出去⟶出来（程乙83頁）

(22) 秦鐘香怜二人又気又急，忙進去向賈瑞前告金栄，説金栄無故欺負他両個。（９回139頁）（秦鐘と香怜のふたりは腹は立つし気は急くしで，すぐさま賈瑞のところへかけこんで行って，金栄がふたりをゆえなく侮辱したといいつけました。）

進去⟶進来（程乙111頁）

次の(23)は対象移動の例である。

(23) 誰知賈環聴如此説，便起了疑心，将彩雲凡私贈之物都拿了出来，照着彩雲的臉摔了去，説……（62回865頁）（ところが賈環は，それを聞くと疑いをおこし，彩雲がひそかに贈った品をすべて持ち出してきて，彩雲の顔をめがけて投げつけ言うには……）

摔了去⟶摔了来（程乙788頁）

これらの例はうごきの主体（例(21)，(22)）或いは対象移動の動作主体（例(23)）の視点に立ったタテの‘去’から新場面を方位の中心としたタテの‘来’への書き換えに相当する。

(24)から(26)は，アンダーラインを付した‘来’について‘去’への書き換えがなされている例である。

(24) 襲人等慌慌忙忙上来搨扶，問是怎么様，又要回賈母来請大夫。（13回176頁）（襲人たちはあわてふためいて，宝玉のもとにはせ寄ってきて助け起こし，どうしたのかとたずね，一方で医者をよんでもらうため賈母に知らせに来ようとします。）

回賈母来⟶回賈母去（程乙147頁）

(24)では(21)—(23)とは逆にタテの‘来’からタテの‘去’への書き換えがなされている。

(25) 宝玉……掲起軟帘自往里間来。麝月只得跟進来。宝玉便推他出去，説：“不敢惊動你們。”麝月只得笑着出来，喚了両個小Y頭進来。宝玉……（21回291頁）（宝玉は……のれんをまくってひとり奥の間に来ます。麝月はやむなくついて来ます。宝玉は麝月を押し出して，「お前たちの世話にはならないよ。」というと，麝月はしかたなく笑いながら出て来て，小侍女を呼び，（宝玉のいる奥の間へ）はいって来させます。宝玉は……）

進来——→進去（程乙242頁）

(25)では，［宝玉と麝月が奥の間に入る→麝月が出る→小Y頭が入る］というそれぞれのうごきの方向がいずれも‘来’によって示されていることから，方位の中心は，［①奥の間→②奥の間の外→③奥の間］と切り変っていると理解される。アンダーラインを付した‘来’は②から③へ向かううごきの方向を示しているが，この新場面へ向かうタテの‘来’がタテの‘去’に書き換えられていると理解される。‘去’に書き換えられた部分は，使役主体（麝月）によってひきおこされる使役対象（小Y頭）のうごきを表わしており，対象移動に準ずるものとして理解できよう。ここでは麝月の視点が採用され，使役対象の小Y頭を使役主体のいわば拡張と捉え，そのうごきの方向が‘去’で示されている。

(26) 林之孝家的等人笑回：“不敢領了。”又站了一回，方退了出来。平児模着臉笑道……（62回876頁）（林之孝の家人たちは「いただくにはおよびません。」と笑ってこたえ，しばらくその場にいてから退出して来ました。（あとに残った）平児は，頬をなでて笑って言うには……）

退了出来——→退出去了（程乙798頁）

(26)はタテの‘来’からヨコの‘去’への書き換えであるが，ふたつの方向性の明白な差異からして，この種の書き換えはまれである。(26)では平児の視点に立ち，林之孝の家人たちの遠ざかるうごきの方向が‘去’に書き換えられている。『紅楼夢』の語りの文における‘来’，‘去’の使用原則に照らすと，(26)の書き換え以前の‘来’は不合理な使用であるが，タテの‘来’の多用に影響された用法と考えることもでき，或いは，問題の‘来’に後続する句が原本には存在したかもしれないことも予想される。

書き換えの圧倒的多数はタテのうごきに関するもので‘去’→‘来’，‘来’→‘去’の両方の書き換えが併存し，特にどちらが優勢という顕著な傾向は見い出せない。『紅楼夢』の写し手は即ち読み手でもあり，その主観の投影による方位体系の部分的再構築が，これらの‘来’，‘去’の間の書き換え作業の意味するところである。

お わ り に

小論では，『紅楼夢』の語りの文章に見られる‘来’と‘去’の使用に関し二種類の方位の中心が存在することを指摘し，各々の場合の視点のあり方の特徴と両者の関連性について考察をすすめてきた。その中で，初出の要素を方位の中心とするような‘来’は，同じように非人称の語り手による物語りの文章であっても，近代以降の作品には一般に見られないようである。たとえば，魯迅『阿Q正伝』では，主人公の阿Qのうごきの方向は基本的に‘去’で表わされ，その他の登場人物が阿Qへ向かううごきの方向が‘来’で表わされている。また，たとえば巴金『家』では登場人物たちのうごきの方向はいずれも基本的に‘去’で表わされている

が，それと同時に登場人物間の視点表現としての‘来’が用いられている，というふうに近代文学の語りにおける客観化への移行は‘来’と‘去’の使用についても見られる。語り手の肉声が伝わってくるような伝統的な語りのスタイルを残した『紅楼夢』には，語り手の主観の間接的な反映として捉えられる言語特徴が，その他にも存在することは十分予想できる。小論ではその他の特徴について取り上げることはできなかったが，今後の課題としておきたい。

＜註＞

(1) 二人称が方位の中心となる場合については，Huang（1977），湯（1979）など。

(2) ‘行く’や‘go’に非直示的用法が存在する（大江1975，Levinson 1983など）ように，‘去’に関しても同様の用法が見られるが，小論では，‘来’と対立的に用いられていると理解できる場合のみを取り上げる。

(3) 久野（1978）pp. 148-149

(4) 森山（1988）pp. 195-196　張麟声（1986）『「来る」「行く」と日中両語の表現性』（未公刊）を考察資料としている。

(5) たとえば劉・潘・胡（1983）p. 339，Huang（1977）p. 148，ヤーホントフ（1957）p. 256，倉石武四郎『岩波中国辞典』の‘来’と‘去’の項など。

(6) 神尾（1990）p. 248

参考文献リスト

Chao Yuan-ren（趙元任）1968　*A Grammar of spoken Chinese,* Barkeley and los Angeles: University of California press

Hopper, P. J. 1979 “Aspect and foregrounding in discourse”, in T Givón, ed: *Syntax and semantics vol. 12,* New York: Academic press, p. 213-241

Huang Shuan-fan（黄宣範）1977 “Space, time and the semantics of LAI and QU”, in R. Cheng, ed: *Papers in Chinese syntax,* Taipei: Wen Ge（文鶴）Inc.

神尾照雄　1990『情報のなわ張り理論―言語の機能的分析』大修館書店

久野　暲　1978『談話の文法』大修館書店

Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics*（安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』1990，研究社出版）

Li, Charles N. and Thompson, Sandra A. 1981 *Mandarin Chinese*（黄宣範　訳『漢語語法』1983，台北：文鶴出版）

劉　月華　1988「趨向補語的語法意義」，『語法研究与探索』4号，北京大学出版社

劉　月華・潘　文娯・故　韡　1983『実用現代漢語語法』北京：外語教学与研究出版社

陸　険明　1989「“V来了”試析」，『中国語文』3期

呂　叔湘　1982『中国文法要略』北京：商務印書館

森山卓郎　1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院

大江三郎　1975『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂

スタンツエル，F. K. (Stanzol, Franz K.) 1979 *Theorie des Erzählens*（前田彰一　訳『物語の構造』1989．岩波書店）

湯　廷池　1979「'来' 与 '去' 的意義和用法」,『国語語法研究論集』台北，学生書局
ヤートンホフ，C. E.（Яхонтов, Сергей Е.）1957 Категория Глагола в Китайском Языке. Ленинград: Издательство. Ленинградского Университета.（橋本萬太郎　訳『中国語動詞の研究』1987，白帝社）
周　遲明　1957「漢語的連動性複式動詞」,『語言研究』2 期